保育者養成短期大学における情報教育カリキュラム（3）

松　山　由美子

1．研究の背景

筆者は、幼稚園教諭免許取得のために必要となる新教科「情報機器の操作」の授業のあり方について研究している。情報化社会から子どもを隔離するような保育ではなく、情報化社会に関心を持ち、自ら関わることのできる子どもを育成できる保育者（保育士および幼稚園教諭）の養成と、教育に携わる保育者一人一人が高度情報化社会における人間のあり方を考え、課題を見出すことができるような授業として捉えた時、どのような講義が望ましいのかを検討する一つの方法として、カリキュラムの開発と評価を試みている。

「情報機器の操作」や「情報教育」という名前から、単にパソコンの操作技術のみを教えるというだけでは、上記のような保育者の養成はできないであろう。また、小学校から高等学校までの情報教育のあり方を見ても、ワープロや表計算などの基礎技能の修得は、短期大学で行う必要性がなくなる日が近い。短期大学で行う情報教育とは何なのかが問われる時代はすぐにやってくると容易に考えられる。

市川（1997）は自身の保育科での講義の実践において「幼児がパソコンを使うこと」についてのディベートを保育科の学生にさせることにより、「学生が本来持つ保育観を見なおさせ、保育者が持つ保育観が保育現場で、さらには子どもたちの価値観の形成に大きな影響をおよぼすことを考えさせるようにしている」と述べている。この市川の考え方は、保育科で情報教育を行う際に必要な考え方の一つではないかと筆者は考えている。

つまり、保育科におけるメディア活用のための講義を考える場合、一般的な「メディアリテラシーの育成」だけではなく、「メディア」そのものについて考える機会でなければならず、ひいては保育者としての柔軟で多様な価値観や保育観を形成できる機会であることが重要なのである。

しかし、宮川・村野井（1999）は、仁愛女子短期大学幼児教育学科の半期科目「教育方法論」の授業において、時間割、案内状、実習園の案内地図の作成および表計算の実習だけでなく、幼児教育・保育現場における幼児用コンピュータの評価を学生にさせる授業を行ったが、学生自身のコンピュータ操作への不安や、教育現場への情報教育導入に対する否定観を変えることができなかったという結論を出している。このように、半期では、特にメディア否定観の強い保育者をめざす学生の意識や価値観を広げたり深めたりすることは非常に難しいといえる。

筆者は、保育者養成機関の一つ、保育者養成校である短期大学（以下、保育者養成短期大学）の情報教育カリキュラムとカリキュラムを支援するシステムの開発を現在すすめている。実際にカリキュラムを開発・施行した経緯およびその結果については、「保育者養成短期大学における情報教育（1）」（松山・今井：2000）および「保育者養成短期大学における情報教育（2）」（松山・今井：2001a）などで述べている。そこでは、今回開発した半期のカリキュラムで学んだ学生の多くは、現場で求められるコンピュータの基本的な操作能力は身につけることができたと自信をつけ、また、コンピュータに対する不安感、不信感、および幼児には必要ないといった否定的な考え方が変容し、多角的な視点から幼児教育におけるコンピュータのあり方を考える姿勢が見られるようになったという結果を出している。

本稿では、前回までの課題を明らかにした上で、1年次のカリキュラムではカバーできなかった「インターネット」をはじめとしたネットワークに関する講義を含めた2年生用のカリキュラムの開発について報告する。

2．研究の目的と方法

本研究の目的および方法、本研究の環境構成とカリキュラムの詳細について述べる。また、本研

究の授業の対象となった受講者についても特徴的な部分について述べる。

2-1　研究の目的

筆者は、前回までの実践校であるN短期大学での1年次の科目「情報機器の操作」を終えた学習者がさらに情報教育を深く学び、保育現場におけるメディアのあり方についてより考える場として、「教育方法・技術」の講義科目のカリキュラム開発を試み、実践した。

筆者が担当する短期大学2年生の半期科目「教育の方法・技術」を、1年次に行った「情報機器の操作」のアドバンスドクラスとして位置づけ、従来の教育方法や技術を「情報教育」を通して見直すための講義として考えたカリキュラムの開発と評価を行っている。評価については、受講する学生の意識が、開発したカリキュラムを通してどのように意識が変容していったのかを探ることで検討することにした。

2-2　研究の方法

筆者はN短期大学保育科「情報機器の操作」の講義において、「保育者としてのメディアリテラシー」育成を目的として開発した保育科における情報教育カリキュラムを実践した。実践期間は2001年10月～2002年1月（後期）の半期で、2年生対象の選択科目（幼稚園教諭免許取得には必修）である。受講者は、1年生の時に「情報機器の操作」を受講している学生96名（すべて女子：2クラス）である。

この講義には適宜参与観察者が入り、授業の様子を定期的に記録している。また、全授業をビデオで記録し、評価の際の補足資料として使用した。適宜、授業者へのインタビューも参与観察者によって行われている。

学生には、講義最終日に質問紙調査を行った(評価項目は補足資料参照)。また、講義で得られたことをまとめるよう指示し提出させたレポートの結果も合わせて参考にする。なお、講義最初の意識については、前学年での「情報機器の操作」の質問紙調査で得られているため今回は特に調査していない。

本カリキュラムで大事にしている、学生のコンピュータおよび幼児教育とメディアのかかわりに関する意識の変容、より柔軟性のある、幅広い知識や考え方の習得を期待していることもふまえて、質問の内容を考えている。

3.「情報機器の操作」の反省と課題

「情報機器の操作」を受講した学生たちの意識は以下のとおりで、筆者が期待した効果があった。

- 受講前の学生の意識は、一度はコンピュータを使ったことがあるにも関わらず、操作能力には非常に不安を示し、保育とメディアの結びつきを非常に否定的にとらえていた。
- 授業での学習に満足感を持ち、授業で学んだ操作能力はしっかりと身についたと自己評価していた。
- さらに、メディアが保育現場に導入されることについても「あってもいいと思う」という緩やかな肯定派が増えたことや、「ただ否定するのではなく、どんな使い道があるのか知りたい」「もっと自分自身が勉強しないといけない」と情報教育の必要性を感じている学生もいた。

しかし、実際には以下に述べるような課題もあることが明らかになった。

3-1　学習者の操作能力が定着していなかった点

受講者の意識は変容し、特に苦手意識を克服した受講者は多かったが、実際には、実技テストの成績に関係なく、学習者のメディアリテラシー、特に操作能力が定着していないことがフィールドノーツより明らかになった。

今回の2年次用カリキュラムを受講した学生の半数ほどが、講義以外でコンピュータを触ることがなかったこともあり、せっかく覚えた操作を忘れてしまっていたからである。また、学生の中には「情報機器の操作」で使用したノートを持ち込み、ノートを見て操作を復習しながらでないとコンピュータに向かえない学生もいたりしたことからも明らかである。

電源を入れたり消したりする操作を忘れていた学生もわずかながらいたようであるが、ソフトの起動や文字入力は最初とまどうだけで、何度か行ううちに特に問題がなくなったようである。しかし、「ファイルの保存」になると最後までとまどい、何度も1年次のカリキュラムで学んだノートを確認したり、周りの友人たちに確認を求めたりしていた。

3-2　学習者の興味・関心に対応できなかった点

また、「情報機器の操作」のカリキュラムに対しての不満点で多かった、ネットワーク関連の講義や体験についても課題として残されている。単に、情報ネットワーク社会に生きる人間として必要だというだけではなく、「情報機器の操作」を終えた学習者へのアンケートの結果から「インターネットやメールについて学びたかった」という意見が多かったことや、「グループ課題研究」の単元の時に、十分にインターネットを使いこなせていなかったことへの学習者の反省や苛立ちが参与観察や課題学習で使用したグループワークシートの記述より見られたことからも大きな課題としてとらえなければならない問題である。

4.「教育方法・技術」のカリキュラム開発と実践

上記に挙げた1年次のカリキュラムの反省および、新たな目標を含めた2年次のカリキュラムを開発した。以下に、実践の概要とその詳細を述べる。

4-1　実践の概要

この「教育方法・技術」は、以前「視聴覚教育」というサブテーマのもとで講義が行われていたこともあり、今回からは「メディア教育」と拡張してとらえることにした。さらに、今までに学んだ従来の保育の方法や技術を振り返るための時間にしたいと考えた。

このカリキュラムは、「情報機器の操作」では扱えなかったインターネットやe-mailについての講義を含むだけでなく、従来の「教育方法・技術」の名称どおり、保育方法や技術について振り返る機会となるように考えられている。

さらに、自分が体験して納得してからでないと思考することが難しいN校の受講者の特性を考慮し、パソコン教材の作成とインターネットでのレファレンスシミュレーションを重視したカリキュラムになっている。そして、最後に実際の保育現場でのパソコン遊びを収録したビデオを視聴させ、保育現場・子どもとコンピュータについて考えさせる機会を得た。

以下、**表1**に示したカリキュラムの概要についての詳細を述べる。

表1　カリキュラムの概要

講義回数	講　義　内　容	講　義　の　目　的
1	幼児用のソフトを知ろう	・幼児用ソフトについて知る ・**子どもの興味・関心を捉える** ・メディアの特性や「目的」「ねらい」を把握する
2—10	パソコン教材を作ろう (市販ソフトを使った紙芝居製作)	・幼児用描画ソフトを活用する ・「教材」について考える ・メディアの特性や「**目的**」「**ねらい**」**を意識して、教材を作成する**
11	パソコン教材の発表会	・幼児を意識した発表をする ・相互評価・自己評価を通して「**教材**」**について再考する**
12	インターネットやメールについて知ろう（幼稚園のホームページを見てみよう）	・ネットワーク社会の基礎（インターネットやメール）について基本的な事柄を学ぶ ・幼稚園や保育所のホームページを知る ・ホームページの閲覧を通して、**保育現場とネットワーク社会の関連やネットワーク社会における倫理について学ぶ**
13—14	インターネットで調べよう (レファレンス体験)	・ある課題についての答えを探す ・ある設定場面での調べ物をする（問題解決能力）
15	保育現場でパソコンが使われていることを考えよう（VTR視聴）	・園での幼児のパソコン活用について学ぶ ・**保育現場におけるパソコンのあり方を考える** ・新しい時代の「保育者の役割」について考える ・**自分の保育観を見直し、今後の保育に生かす**

4-2 「幼児用のソフトを知ろう」

まずはオリエンテーションとして、これからの講義で何を学ぶのかを簡単に説明している。パソコン教材を作成するにあたり、一番大事なのは、操作技術の習得ではないことをまず述べる。特に重要なのは、他の講義で行っている製作や保育技術などをもう一度改めて考え直してみようということなのである。なぜなら、このカリキュラムの目標は、受講者への「情報教育を深く学び、保育現場におけるメディアのあり方についてより考える場」の提供だからである。

そして、これからの製作に向けて、実際に市販されている幼児用の優れたソフトを見せ、遊ばせることにした。こうすることにより、現実は幼児がこういったソフトですでに楽しんでいるのだということを知ることができるだけでなく、これから受講者たちがどのようなものを作ればいいのかを具体化し明確化することができると考えたからである。したがって、自分たちの製作に生かせる点はメモを取らせ、今後の自分たちの製作する作品にたくさん取り入れるよう指示をしている。

なお、この単元で取り上げた主要なソフトは以下のとおりである。

・『おばあちゃんとぼくと』（インタープログ）
・『PINGU となかまたち』
（ザ・ラーニングカンパニー）
・『テレタビーズのおきにいり』
（ザ・ラーニングカンパニー）
・『SESAME STREET　おんがくをつくろう！』
（ザ・ラーニングカンパニー）
・『五味太郎　言葉図鑑　かざることば』
（NEC インターチャネル）
・『ポンキッキーズ 3　ならべてマウス』
（JUSTSYSTEM）
・『ポンキッキーズ 4　どっきんリズム』
（JUSTSYSTEM）
・『A Silly Noisy House』　（VOYAGER）

いずれもソフトとして高い評価を得たものや、実際に幼稚園などで導入されているものである。また、受講者になじみのある幼児番組と関連したソフトを多く用いることで、より興味を持たせることができるだけでなく、TV番組とソフト、また絵本とソフトといったメディアの違いによる効果や特性についても考えることができるのではないかと考えたからである。たとえば、『ポンキッキーズシリーズ』『SESAMI STREET　おんがくをつくろう！』『テレタビーズのお気に入り』『PINGU となかまたち』の紹介では、各テレビ番組の成り立ちの経緯や教育的効果・配慮なども同時に説明している。こうすることで、受講者たちの興味や感心を大きくすることができると考えたからである。また、この考えは、カリキュラムの開発目的である「従来の教育方法や技術を情報教育を通して見直すための講義」としての役割を受講者に気づかせるためにも重要だと考えた。

さらに、受講者の「パソコン＝ゲーム＝身体に悪い」という価値観を変えるため、説明の時には、実際に幼児がこれらのソフトで遊んでいる様子を交えながら話すように心がけた。『おばあちゃんとぼくと』のソフト紹介の時には筆者が行った実験（松山：1998）の結果の１つである「実体験を伴わずにコンピュータソフトで遊ぶ子どもは、コンピュータの疑似体験を理解できない（例えば、夏の砂浜の砂が熱いと理解できない）」ということを交えて話すと大変興味を持って聞いてくれるのではないかと考えた。

また、『五味太郎　言葉図鑑　かざることば』のソフト紹介の時は、全員で声を出して読み上げたり、『テレタビーズのお気に入り』や『ポンキッキーズ　どっきんリズム』のソフト紹介の時は、実際に受講者が全員椅子から立って、リズムに乗って身体を動かして楽しんだりできるようにした。パソコンでのゲームはじっと座って行うものばかりでなく、思わず身体が動くように設計されているものもあることを知らせ、受講者がこれから作成するソフトもパソコンの中だけでとどまらないように話すことが、このカリキュラムの目標から考えても重要であると考えた。

4-3 「パソコン教材を作ろう」

ここでは、実際に紙芝居型の幼児用教材を２人一組で作成する。作成に使用したソフトは『Kid-Pix Studio 2001』（インタープログ）である。幼児用でかつ幼稚園などで多く導入されているこのソフトを使用した理由は次の２点である。

１）操作技術の習得が目的ではなく、むしろ、幼

児用ソフトに受講者自身が触れ親しむことで、幼児の興味や関心に触れ、幼稚園などで多く導入されている理由をそれぞれの受講者なりにつかむことが受講者の意識変容には重要である。

2）操作が簡単で、行えることも限られている分、受講者の保育者としての発想やひらめきを大事にして教材を製作することができる。パソコンの派手な機能にばかり目を奪われ、中身のない作品を作っても意味がないと考えたためである。

さらに、2人一組で作成させた理由は、1クラスあたりのパソコン設置台数が足りないという物理的な問題だけではなく、2人で行うことによって話し合い、協力して物事を成し遂げる力の育成ができると考えたためである。この考え方は1年次の「情報機器の操作」の時の「仲間と協力して問題解決する力の育成」と同じ目標を踏襲している。また、1年次の講義の終わりには「操作を習得できた」と答えた学生も実際にコンピュータを目の前にすると操作に不安を覚える学生も多くいたため、操作・技術不安の軽減にもなると考えた。

さらに、2人組で行う一番重要な理由は、実際に幼児が保育現場においてパソコンで遊ぶ時には一人で遊ぶことがほとんどなく、複数で遊んでいるためである。実際に幼児が遊んでいるVTRを見せる前に、受講者が自分たちで1台のパソコンを複数で使用することにより、複数人数で1台のパソコンを共有する楽しさを体感した方が、幼児がパソコンで遊んでいるVTRを視聴した時により感情移入ができ、遊ぶ子どもたちの理解がしやすくなるのではないかと考えたからである。

また、最後にはまとめとして作品発表会を行った。他者の作品を評価するとともに自分の作品を自己評価する機会を設けて、パソコンという枠を越えた「教材」について改めて考え直すことを目的としているためである。事実、教材は「作って終わり」ではなく、実際に子どもたちの目の前で使われ、自己評価するところまでが大事で、受講者の満足が作成し完成したところでとどまってしまうのを避けるためである。

また、他の受講者の作品を見てのレポート課題を出している。また、発表会の最後に、自分たちの作品の長所と反省点を述べさせるレポートも課した。

4-4 「幼稚園のホームページを見てみよう」

インターネットやe-mailについての語句やしくみなどの簡単な説明をした後、実際にInternet Explorerを使用してブラウズする体験をさせることで、ネットワーク社会の基本的な知識を身につけさせることを目的とする。また、同時にネットワーク社会における倫理についても考えさせる機会とする。

ネットワーク社会の基本的な知識の説明は、テキストや解説だけでなく、幼児用ソフト『カルロとわくわくインターネット』(IBM)も用いて行った。幼児用ということで分かりやすいだけでなく、受講者が実際に幼児と接する中でネットワーク社会を説明したり、ネットワーク社会を子どもの視点で考えたりする時の参考になるのではないかと考えたからである。

また、受講者たちになじみの深い携帯電話でのメールやi-modeやSKYweb、EZ-Webについても話をした。これらの携帯端末とインターネットがどのように絡んでいるかの説明も行う時には携帯電話に入ってくるスパムメールの仕組みについても話した。

さらに、インターネット上で問題になっているコンピュータウィルスについての話も行った。

それから、インターネット体験をさせた。まずは、ウィルスなどセキュリティを守るにはどうすればよいかということも含めて、ブラウザソフトの解説やウィルス対策を行っているホームページの紹介を行った。

それから、受講者の興味を考慮した上で、主に幼児教育に関するホームページや、幼稚園・保育所のホームページを閲覧させた。幼稚園や保育所、つまり幼児教育とネットワーク社会は疎遠なものであるという意識から抜け出し、幼稚園や保育所とネットワーク社会のつながりを把握してもらうためには一番有効だからである。また、幼稚園や保育所のホームページがどういうところに気を配っているか、何を掲載しているかなどに注目させることで、保育者として知っておきたいネットワーク社会の倫理について学ぶ機会とした。

またNHK教育テレビの番組『すくすくネットワーク』(http://www.nhk.or.jp/sukusuku/) のホームページを始め「Yahoo! Japan」(http://www.yahoo.co.jp/)の「育児」カテゴリの紹介、掲示板やフォーラムの紹介と気をつけるべきネットマナーについての話も同時に行った。

4-5 「インターネットで調べよう」

さらに、インターネットで「分からないことを検索して調べる」という体験をしながら問題解決能力が養えるように、図書館司書教育などで行われているレファレンス教育にヒントを得て、2人1組で協力しながら、質問の答えをインターネットで探す体験や、子ども用に作られたページ閲覧をさせることで慣れさせた。これは、1年次のカリキュラムで「うまくインターネットで調べることができなかった」という受講者の不満に応え、よりよいインターネットとのつきあい方、また、ネット上でのマナーなどを学ぶよい機会とするためである。

さらに、保育に関連したキーワード(今回は「虐待」)を挙げ、検索シミュレーションゲームを行った。前回のレファレンス作業で上手くいかなかったところを思い出しながら、検索エンジンの使い方や用語の説明、特徴などを説明し、実際に2人1組でシミュレーションさせた。

最後に、各グループから、どういうテーマでどう調べ、どのホームページにたどり着いたかを発表しあい、自分たちの検索について振り返る機会を持った。興味によって絞込みの仕方が変わることや、たどり着いたホームページに書かれてある内容の信頼性や信憑性などを考える機会とした。

4-6 「保育現場でパソコンが使われていることについて考えよう」

今までのまとめにあたる最後の講義は、実際にパソコンを活用した保育を行っている保育現場の事例を集めたテキストやVTRを使用し、保育現場における子どものパソコン活用について受講者が考える機会を持つことができる時間にした。使用したVTRは村上優 (1995) の実践でも触れられた大阪府堺市の金岡幼稚園の実践記録と、同じく村上優らが2001年度に行った兵庫県揖保郡の半田幼稚園の実践記録をまとめたもの（よみうりテレビ2001年5月29日放送『ニューススクランブル』の特集VTR)、さらに、筆者が1997年11月に記録した大阪教育大学附属平野幼稚園における自由保育中のパソコン遊びをまとめたVTRの3つが主である。

また、テキストは、堀田・向後(1999)など、子どもの表情がうかがえる事例が載っているものを中心に取り上げた。

また、これらの資料を取り上げて解説する際には、特に賛成や反対という意見を教師側が押しつけるのではなく、いろんな事例からよりよい情報化社会と幼児の関わりを考えてほしいということを強調している。また、実際に受講者に「自分が赴任した保育現場でパソコンが導入されることになったら」というシミュレーション課題を提示し、設置台数や場所、活動のための留意点などを考えさせた。さらに、若い夫婦の家庭におけるパソコン保有率を考えると、生まれた時から家にパソコンがあるのが当たり前という子どもを保育者として保育しなければならない状況がそう遠くない未来にやってくることを提示し、自分が学ばなければならないことや、今まで体験し学んだことをどう今後に生かしていくかを考えてまとめることで、全カリキュラムのまとめとすることにした。

5．本研究の結果

カリキュラムのうち「パソコン教材を作ろう」の後および「保育現場でパソコンが使われていることについて考えよう」の後にレポート課題を出し、それぞれについての自己評価および自分の意見を提出させた。また、全カリキュラムの終了後に、受講者に対して質問紙調査を実施した（補足資料参照)。

以下、レポートの内容および質問紙調査の結果から、今回開発したカリキュラムが受講者にとってどのようなものであったか、またカリキュラムの目標は達成できたのかについて検討する。

5-1 教材作成で受講者は何を学んだか

パソコン教材を作成することにより、受講者がどのように自己評価を行ったかをレポート形式で回答させた。受講者たちの多くは作成中と発表の2つの場面で学んだと回答している。以下にその詳細をまとめる。

1）教材作成を通して

・パソコン操作の苦労と作品完成の充実感。難しかった。時間がかかった。けど、楽しかった。
・やればできると思った。
・友達との協力が不可欠だと思った。また、さまざまな発想をまとめる大切さが必要だと思った。

2）発表を通して

・自分で作ったものを見せる楽しさを知った。
・声の出し方。話しかけ方。役になりきる。
・歌や手遊びを取り入れた構成を考える。
・リハーサル、準備の大切さ。

以上に挙げた内容は、他の実技系の講義でも言える内容ではあるが、パソコンの操作技術に不安を覚え、またせっかく1年次で習ったことが身についていなかった受講者に大きな自信を取り戻したと言えるのではないだろうか。

また、発表を通して学んだことの中には、歌は歌、手遊びは手遊び、パソコンはパソコンといったように各技術をばらばらに切り離して考えていたものを統合し、組み合わせて作品として完成させて見せることで、子どもたちにより興味深くて楽しい作品となることを学んだ学生が多かった。

これは、「教育の方法・技術」という観点から見ても非常に意義のあることではないかと思う。保育者として子どもと接していく中で、短期大学で学んださまざまな技術をバラバラに活用するのではなく、子どもたちに何かを教えたり、見せたり、楽しませたり、援助したりするには、より効果的で、より分かりやすく、より楽しく工夫しなければならない。その時には、メディアミックスの考え方を取り入れること、すなわち多様な表現方法を組み合わせて提示することは重要なポイントとなるからである。

この観点については、受講者が作成した教材を発表会で発表した時に行った受講者どうしの相互評価にもよく表れていた。以下に、相互評価での回答をまとめた。

・教材の目的を吟味する。
・子どもが見るとどう思うかを考える。
・発表での声の大きさやテンポ、身振り、歌、表情などを考える。
・（お話の）展開を考える。
・（クイズものの）言葉がけについて考える。
・友達の発想に学ぶ。

ここに表れた回答はすべて、通常のオールドメディアによる教材作成でも当たり前に考えていないといけないことばかりであり、「パソコンを使う」ことの特殊性はあまりないことが分かった。むしろ、パソコンを使うことで本来考えるべきことをより意識して考えることができたのではないかと思われる。

保育者がパソコンでの教材作成を通して、さまざまな表現方法や手段をそれぞれの特性を考えて構成することで、従来のオールドメディアによる教材作成の時も意識化できるようになるのがこのカリキュラムの最終的な目標の1つでもある。

実際に次にオールドメディアでの教材作成時にこの意識が転化されるかどうかは分からない。しかし、パソコンを使うことで、単に「上手に作る」「かわいく作る」という発想から抜け出し、教材作成の際に大事にしなければならない「教材の目的・目標」や「子どもの反応に対する予測」「教材にともなう言葉がけ」といったことが意識化できたため、このカリキュラムで学習することで、受講者はこの目標に一歩近づいたと言えるのではないだろうか。

5-2　カリキュラムによる受講者の意識変容

パソコン教材を作成し、インターネットについての基礎的な知識を勉強したことで、受講者が「保育とコンピュータ」に関して学んだかを無記名によるアンケートで調査した。

調査の結果より、受講者の多くは「学ぶことでメディアに対して、また、保育に対しての自分の考え方が変わり」、このようなメディアと保育に関する学習について「もっと学びたい」と思っていることが明らかになった。

この結果を、1）子どもの立場での保育現場におけるコンピュータの利用方法、2）このカリキュラムでの講義を受けて、メディアあるいは保育に対しての考えの変化、3）このカリキュラムでの講義のような授業内容をもっと学びたいと思うか、の3点を中心にさらに詳細に検証してい

くことにする。

5-2-1　子どもとコンピュータ

自由記述の中から読み取れた単語をカテゴリ化し、どのような単語が多く見られるかを調べた。その結果が**表2**のとおりである。

表2　受講者にとっての「幼児のコンピュータ利用方法」

カテゴリ	語数
「絵を描く」	30
「自由に遊ぶ」	25
「図鑑的利用」「現実と絡めて遊ぶ」	23
「ゲーム」	15
「子どもどうしのかかわり」	12
「音や歌で楽しむ」	11
「ホームページを見る」	3
「マルチメディア絵本」	2
「勉　強」	1
未記入	1

この**表2**から分かるのは「自由に遊ぶ」という記述が多いことである。パソコンは難しいから規制をするといった考え方ではなく「子どもの興味・感心があれば自由に使わせてあげたい」という気持ちが増えてきたことが分かる。それは、「保育者の立場として気をつけることは」という質問に対する自由記述の中に「ウィルスなどのセキュリティ対策」同様、頻出したのは「幼児の遊びを見守る」「幼児が困った時には応えられるようにする」という記述が見られるところからもうかがえる。パソコン遊びを保育者の立場から見るのではなく、子どもの立場から考えられるようになったのではないだろうか。

さらに「現実とパソコンの世界」に関する記述も多いことが挙げられる。VTR視聴から感じたと思われる記述も多く見られ、図鑑的な利用や、「現実の行事などと絡めたソフトを作って見せる」といった記述があった。幼児教育で一番大事な「遊び」「体験」とコンピュータやメディアとを絡め、関わらせることで、より子どもの体験や遊びが充実することまで意識化されているのではないだろうか。

また、「子どもどうしのかかわり」に関する記述も見られた。複数で遊ぶことだけでなく、一人で遊んでいる子への気づきが見られるようになった。一人で遊んでいる子が決してパソコンオタクではなく、集団生活で何らかのトラブルがあったのかもしれないと考えて保育を振り返る幼稚園の例を解説したところからの意見が多いと思われるが、「普段の集団保育を見直すきっかけになる」と答えた学生が多かった。

なお、1人「勉強」と書いた受講者がいた。しかし、この受講者の記述は「実習園では勉強に使っていました。でも、自由に遊ぶことや子どもどうしが楽しんで遊ぶこともできるんだと分かりました」というものであり、パソコンを勉強するだけのものとして捉えているのではないことを追記しておく。

5-2-2　メディア・保育に対しての考え

次に、このカリキュラムでの講義を受けての、メディアあるいは保育に対しての考えの変化について述べていく。質問が2重になっているので、ここでは記述より「保育とメディアの関わり」に対して考えが変わったかどうかを読み取り、重複回答しないように項目別に分けた。その結果は**表3**のとおりである。

「興味は持った」というのは、「考えは変わらないが、もっと深く学びたいと思った」「考えは変わらないが、もっと保育現場におけるパソコンの役割を知らないといけないと思った」という記述である。この項目も含めると受講者の86.5%が「保育とメディアのかかわり」を肯定的にとらえることができるように考えを変容させたことが分かる。

表3　受講者の意識「『保育とメディアの関わり』に対して考えが変わったか」

考えが変わったか	人数	%	
「は　い」（肯定的に）	81	84.4	86.5
「興味は持った」	2	2.1	
「は　い」（否定的に）	4	4.2	4.2
「いいえ」	6	6.3	6.3
「どちらでもない」	1	1.0	1.0
未記入	2	2.1	2.1
計	96	100.1	

否定的な「はい」と言うのは主にコンピュータウィルスなどにより「インターネットが思っていたよりも怖いものだと分かった」「セキュリティを守ることの難しさを感じたので自分には知識がないからよけい不安になった」という記述を分類した。この記述からは「だから使いたくはない」なのか「だからもっと勉強したい」なのかは言明できないのでこの項目にしたが、次回のアンケートでは受講者の意識をより具体的に記述できるような質問項目を再考すべきである。逆にいえば、それだけ受講者はさまざまなことをこのカリキュラムから感じ取っていたのではないかと思う。

5-2-3　カリキュラムへの受講意欲

最後に、3）このカリキュラムでの講義のような授業内容をもっと学びたいと思うかについての回答をまとめる。この質問も自由記述にしたため、「はい」「いいえ」と書かれてあるもの以外は記述より「はい」「いいえ」「どちらでもない」のいずれかに読み取った。その結果は**表4**に示したとおりである。

否定的な意見の中には「いろんなことがたくさんありすぎて何がしたいのか分からなかった」という、カリキュラムの詰め込みに対する指摘や、「作品は一人で作りたかった」というような共同作成に対する否定的な意見もみられたが、「私にはコンピュータが必要ではないので学ぼうと思わない」という意見もあった。この受講者は先の「保育とメディアのかかわりに対して考えが変わったか」に関しては未記入であったため、かなり強いメディア否定観を持っているか、このカリキュラム自体への不満を持っているかではないかと思われる。

表4　受講者の意識「このようなカリキュラムを引き続き受けたいか」

このような講義をまた受けたいか	人数	%
「は　　い」	78	81.3
「い　い　え」	5	5.0
「どちらでもない」	2	2.1
未　記　入	11	11.5
計	96	99.9

おおむね肯定的な評価を受けたが、未記入が10%を超えているため、まだ、カリキュラムの改善の余地は十分にあると思われる。

6．今後の課題

学生たちの受講後の質問紙調査や各単元で出されたワークシートやレポートを分析し、今回のカリキュラムについてのより詳細な評価と次年度に向けての改良を行う。学習者が意識を変容させたポイントとなる作業や説明部分は残し、内容の精選や講義カリキュラム全体を貫く「保育とメディアのかかわり・役割を考える機会」という意識づけを明確に打ち出していけるような構成を考えていかなければならない。

また、事後アンケートに不備も多く見られたので、評価方法の改善も同時に考え、事前アンケートを取るなどし、より受講者の意識の変容が具体的に読み取れるような方法を模索したい。

7．　要　　約

筆者は、情報化社会に関心を持ち、自ら関わることのできる子どもを育成できる保育者（保育士および幼稚園教諭）の養成に対してどのような講義が望ましいのかを検討する一つの方法として、カリキュラムの開発と評価を試みている。今回は、前回までに筆者らが開発したカリキュラムを受講した学生が2年次で受講するためのアドバンスドクラスのカリキュラムを開発し、評価した。

このカリキュラムでは、1年次のカリキュラムからの反省や希望を盛り込むだけではなく、受講者に「教材の意味を再考すること」と「パソコンへの意識の変容と保育とメディアの関わりへの意識を改善すること」という2点を重要な目標として考えている。

そのため、「パソコンで教材を開発する」ことで、今までの教材作成の知識や考え方を見直すだけでなく、メディアと保育との関わりを考える契機となる授業にしようと試みた。また、メディアと保育の関わりに関してはより深く学べるよう、幼児用ソフト紹介やインターネット体験を取り入れた。

このカリキュラムの評価は、受講者への受講後

の質問紙調査などから行った。その結果、受講者の意識は「より保育とメディアの関わりについて学びたい」「パソコンが幼児にとって不必要ではなく、可能性のあるものだと感じた」といったおおむね良好に変容するという結果が出た。

しかし、満足ではないと見られる回答もあることや、質問の仕方も受講者の意識を把握しにくいものもあり、再考を要す部分が多く見られた。今回のカリキュラムについてのより詳細な評価方法と次年度に向けての改良を今後の課題とし、保育者養成校にとってメディアと保育のあり方を考えるカリキュラムについて考えていきたい。

＜謝　辞＞

この研究を行うにあたり、フィールド観察を行い、調査研究を共同で行い、貴重な助言を下さった、大阪大学大学院人間科学研究科博士後期過程の今井亜湖さんに深く感謝し、ここに記します。

＜主要参考文献＞

古市久子・遠藤　晶・松山由美子・吉田清二（1995）「アンケート調査のデータ読み取り作業における信頼度と問題点についての研究」大阪教育大学紀要　第4部門 教育科学，第44巻第1号，27-40

堀田龍也・向後千春（1999）『マルチメディアでいきいき保育』明治図書

市川伸一（1994）「メディアを活かした表現活動」『コンピュータを教育に活かす「触れ、慣れ、親しむ」を超えて』勁草書房，188-212

今井亜湖・松山由美子（2001）「保育者養成短期大学における情報教育（2）」日本保育学会第54回大会研究論文集，174-175

松山由美子（1998）「幼児教育におけるマルチメディア学習環境の研究―エデュテインメントソフトの検討―」『教育メディア研究』第4巻第2号，44-51

松山由美子・今井亜湖（2001a）「保育者養成短期大学における情報教育（1）」日本保育学会第54回大会研究論文集，172-173

松山由美子・今井亜湖（2001b）「保育者養成短期大学における情報教育カリキュラム（2）」名古屋柳城短期大学紀要，No.23，145-160

松山由美子・今井亜湖（2000）「保育者養成短期大学における情報教育カリキュラム」名古屋柳城短期大学紀要，No.22，125-136

宮川祐一・村野井均（1999）「幼児教育専攻学生のコンピュータリテラシー育成」『教育メディア研究』第5巻第2号，75-81

村上　優（1995）『宇宙からやってきたピピ―金岡幼稚園のコンピュータ大作戦―』C&E出版

補足資料1　講義最終日用の調査用紙

授業後アンケート

このアンケートはテストではありません。この講義をとおして、みなさんがどのように保育とコンピュータに関して学んだかを理解するものです。このアンケートをもとに、今後の授業の内容を改善していきたいと思いますので、ご協力お願いします。

1．幼児教育とは具体的にどんな活動をいいますか。

2．保育現場におけるコンピュータの利用について、どのような利用方法がありますか。子ども、保育者それぞれの立場におけるコンピュータの利用方法を具体的に書いて下さい。

3．これからの保育者にとってコンピュータはどのような役割を果たす道具だと思いますか。

4．保育現場においてマルチメディアやインターネットを利用する際に保育者はどんな点に留意しなければならないと考えますか。

5．この授業をうけて、メディアに対して、あるいは保育に対して、自分の考え方が変わったと感じたことがありますか。

6．この授業のような学習内容をもっと学びたいと思いますか。あなたの意見を聞かせてください。

"Information Education" Curriculum at the Child-Care Person Training Junior College (3)

Matsuyama, Yumiko*

To keep up with the information oriented society, it is necessary to train the child-care personnel (or kindergartner) with compulsory subjects such as *Operation of Information Technology* and *Information Education*. Furthermore, it's necessary to change their opinion and keep their behavior better in the information oriented society. So researcher tried to develop an advanced curriculum *Educational Method and Technology* for the learners who trained to be the kindergartner and got credit for *Operation of Information Technology* and *Information Education*.

This advanced curriculum Educational Method and Technology make up for previous curriculum and has mainly two means. 1) Curriculum is to study the educational materials (made not only old media such as paper, and also new media such as computer software), 2) Curriculum is to change learners' view about thinking care of children from their firm idea about "Computer has not need for children" into a more flexible attitude and mind about children with computer. And we assessment the curriculum with learners' reply and opinion in questionnaire, teachers opinion from contents in interview.

The result for a curriculum is as follows. 1) Students in the curriculum thought what is important to make educational material through the production an original educational material with computer and the presentation their material to audience. 2) Curriculum included learners' interest and useful activities for kindergartner. 3) Learners can recognize deeply and greatly the relation between information society and early education of today like a kindergarten or a nursery school.

キーワード：*情報教育 (Information Education)，保育者養成短期大学 (child-care personnel training)，保育者としてのメディアリテラシー (media literacy)，教材開発 (Development of Teaching Material)*

**Nagoya Ryujo (St. Mary's) College*